

雑感Ⅱ

学校教育スタッフ企画幹 村上 護

昨年度の事務所便りでは、企画幹一年生として4月からどのような日々をどのような思いで勤めたかを綴りましたが、紙面の都合で5月までとなりました。(当然のことながら)どなたからも「続きを読みたい」というリクエストもありませんでしたので、一応5月までで述べたかったことは完結したことにします。なお、お二人の校長先生から、「雑感」に対する感想をお電話でいただきました。感謝しています。やはり、何事も反応があることは嬉しいものです。

さて、今年度も9月18日～10月28日の間、管内44校を訪問させていただきました。子どもたちの成長は、知・徳・体の調和が求められることは言うまでもありませんが、時間の都合上、全国学力調査を踏まえたPDCAサイクルと学力育成を中心に各校の取組を伺いました。各学校とも、子どもの実態、地域・家庭の状況を踏まえ、学校教育目標の実現に向けて真摯に取り組んでおられ、本当に頭の下がる思いであります。独自の教育活動に加え、市町教委や県教委の事業を活用していただきながら、創意工夫された取組を聞かせていただきました。

教育事務所からは、次年度も引き続き県教委が主催する研修を原則水曜日から金曜日に実施することとし(長期休業期間を除く)、月曜日と火曜日を学校の職員が揃って有効に活用していただくようお願いしました。これには、関係諸団体の協力も必要です。スケジュール調整には、ずいぶんご苦勞をされるかと思いますが、これを機にこれまでの各種事業やそれに伴う会議等が本当に必要なのか見直すことにつながるかもしれません。

私は、この冬、趣味のアマチュア無線に使っていた古い機材をほとんど処分しました。私の小部屋に並べてあったもので、中には30年ほど連れ添ったものもあります。古い無線機にもそれなりに役割と愛着があり手放せませんでした。思い切って処分し、最新の無線機を一台入手しました。(妻には内緒です。ここだけの話にしてください。)

相当無理のあるたとえ話でしたが、教育の世界も新しいことを取り入れる際には、勇気を持って何かを削減することも必要かと思えます。実際には、今の取組に喜ぶ子どもたちの顔や逆になくなった時の保護者や地域からの苦情等を考慮して、削除することは難しいことも承知しています。また、伝統ある〇〇と名のつく諸団体の事業を削減するのには相当なエネルギーを要することかと思えます。

全てをいっきに削減することは困難にしても、統合やスリム化して再構築しなければ、教育界全体が肥大化して身動きが取りにくくなってしまふことが危惧されます。誰もが知恵と勇気を出して、この問題に向き合わなければならないのではと思う今日この頃です。

私は、今、この春新規採用となる方々に事務連絡をしています。現在、他県にいる方に、「益田で待っていますよ!」と声をかけると、「はい! よろしくお願ひします!!」と希望に満ち溢れた声が返ってきます。春はもうそこまで来ています。私も新しい無線機の前に座って気分転換をし、お仕事にもうひとがんばりしなければなりません。



特別支援教育、10年目の節目に思うこと

吉賀町教育委員会 派遣指導主事 岡本 博

平成28年4月1日、平成19年度に法的に位置づけられた特別支援教育が10年目を迎える節目の日です。10年目を迎えるということで、少し考えてみたいと思います。

「特殊教育」から「特別支援教育」に転換したことで、「校内委員会の設置」「実態把握」「特別支援教育コーディネーター」「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」「センター的機能」等の新しい言葉が徐々に浸透するとともに、その内容や体制整備も充実していきました。そして、一番大切な目の前にいる特別な支援を必要とする子どもの理解と対応が進んだことが大きな成果であると思います。

「特別支援教育」に転換した時から重要視されてきたのが、「授業改善」であると思います。「特別支援教育の視点を生かした授業」や「ユニバーサルデザインの授業」という考え方が広がってきています。この2つの考え方は、よく見聞きする言葉ではありますが、定義については十分に確立されていない部分があります。

前者は、「特別な支援を必要とする子どもの特性等に対応した指導・支援」「〇〇できないのは△△かもしれない（状態の仮説）、〇〇という方法はどうか（方法の仮説）」という考え方を取り入れた授業のイメージでしょうか。

後者は、「特別な支援を必要とする子どもには“ないと困る”支援であり、どの子にも“あると便利”な支援」「クラス全員の子どもが楽しく学び合い『わかる・できる』を目指す」という考え方を取り入れた授業のイメージでしょうか。

両者の違いははっきりしませんが、共通しているのは、「子どもの側から考える」「指導者側の課題としてアプローチする」「事後的な対応ではなく、事前に対応を想定する」ということです。「子どものよりよい学びのため」という同じゴールに向かっているものなので、どちらか一方の考え方にする必要もないように思います。

いずれにしても、教師が「目の前の子どものための努力＝授業改善」を日々積み重ねていくことが大切であるということです。1人で日々努力することもすてきですが、学校というチームや近隣の仲間で情報を交換・共有していく方がより楽しいかもしれません。

年度末にある校長先生が、「ユニバーサルデザインの授業づくりについて、もう少し具体的に考える必要がありました。来年度は、やってみます。」という趣旨の話をしてくれました。校長先生の頭の中には、「子どものよりよい学び」「教師の授業力向上」の両方が思い浮かんでいたに違いありません。

今年度、学校等を訪問する中で、気がついたことがあります。それは、「大人が笑顔になると子どもも笑顔になり、子どもが笑顔になると大人も笑顔になる」ということです。笑顔がある場所では、大人も子どももうれしそうに学んだり、生活したりしているように感じました。笑顔の場面に出会うと、こちらも思わず笑顔になり、温かい気持ちになります。これからも多くの笑顔に出会えることを楽しみにしています。



人間関係の構築と豊かな学びの空間

益田市教育委員会 派遣指導主事 兼子 史寛

久しぶりに、他県の学校の公開研究会に参加してきました。この研究会の公開内容については、HPにおいて必要最小限の情報しか提示されていませんでした。しかし、社会科の授業の単元とテーマをみただけで、個人的に強く興味を抱かせるものがあり、当日公開される授業を楽しみにしていました。

さて、公開研究会当日。二コマ目の授業がはじまり15分が経過したときのことです。期待していたとおり、課題解決に向けてグループ内で活発な意見交換が行われ、見ごたえのある活動が展開されていました。少しでも近くで、発する言葉を聞き取りたいと思い、次第に参観者の前の方に移動しようと思った時でした。「すみませ〜ん、すみません、すみません」とやや声をおさえ、少し腰をかがめながら、50人以上はいると思われる参観者をかきわけるように、一人の生徒が教室へ入ってきました。当日は土曜日でもあり、本来なら休業日だと思われ、しかも公開のために変則時程になっていました。その生徒の髪は見事なまでに寝ぐせがついており、ひと目で、寝坊しての遅刻そのものでした。彼は、自分の席に着き、同じグループのメンバーから授業で使うプリントを受け取ると、自分の考えを説明しているメンバーの話の聞き始めました。何分か後には、グループの中で自分の考えも説明していました。あまりにも自然に学習の中に入り込むとともに、遅刻してきた彼に対して、とやかくいうこともなく、簡単に何をいま行っているのかを伝え、共に学びを進めてく生徒たちの姿に驚きました。遅れて入ってきたクラスメイトによって学びのペースが乱れることもなく、むしろメンバーがそろったことで更に思考の交流が深まったようにさえ見えました。更に、遅刻してきた彼に対する授業者の接し方も、近寄り小さく声をかけ、そのタイミングと間合いが絶妙でした。



授業後の分科会において、授業者から、現在のような学習状況になるまでには、やはり時間も費やしたこと、また、生徒指導上課題のある生徒もいることを知りました。それにしてもあの温かい雰囲気での学びの空間は、どうやってできたのだろうか？ 生徒たちの表情を思い浮かべながら、まとめてみました。

1. 信頼関係の構築 — 教員（授業者）と生徒の信頼関係が生徒同士のつながりを作り出している。
↓
2. 安心の中での学び — 友達との安定した関係が、心の安定を生み、学ぶ姿勢を支えている。
↓
3. 聞き上手 — 自分とは違う考え方の人の意見をしっかりと受け止め、自分の考えを深めていく。

学びを深めていくためには、様々なアプローチがありますが、人間関係における信頼構築が大きなポイントだと感じました。自分の考えや思いを受け止めてくれる仲間がいる。わからないことは、安心して「教えて」と言える。そんな学びの空間をコーディネートしていくためにも、つながりを大切にしたい児童・生徒理解の必要性を強く感じました。

『遊びの力』と『遊ぶ力』

津和野町教育委員会 派遣社会教育主事 大島 功央

◎場面 1

「カタカタカタ…」ドングリの形をしたおもちゃが音を立てて坂を下っていきます。それをじっと見つめる A ちゃん(3歳ぐらい)。坂の下まで行くとまた坂の上に。「カタカタカタ…」飽きずに何度でも繰り返します。やがて向かい側に B ちゃん(同じく3歳ぐらい)が座ります。A ちゃんが B ちゃんにドングリを差し出しました。受け取って『ありがとう』のしぐさをする B ちゃん。坂の上にドングリを置いて、「カタカタカタ…」見つめる二人…。

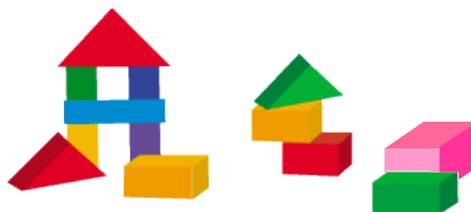


◎場面 2

放課後子ども教室の一場面。みんなで「だるまさんがころんだ」をすることに。しばらく見ていると、鬼「だるまさんがころんだ！」みんな床にゴロゴロ。鬼「だるまさんが寝た！」みんな寝たふり。でたらめルールなのに、なんだかみんな楽しそう。

どちらも目にしてうれしくなった場面です。今年度も、子どもたちとの関わりをとおして、「遊び」について考えてみました。

「日本語で『遊び』というと、『仕事』や『学習』に比べて一段レベルの低いものとして扱われがちです。一方、英語の『PLAY』は、砂遊びにも、演奏やスポーツにも使われ、そこには“全身全霊で”というニュアンスが含まれています。(おもちゃインストラクター講座より)」実は、子どもにとって遊びは真剣勝負であり、大切な「学び」の場なのです。例えば、子どもたちは「積み木遊び」の中で、自分(たち)の世界に浸り、集中力、想像力や巧緻性、コミュニケーション能力などを自ら自然に身につけていくことができます。しかし、子どもが遊んでいるのをさえぎり、積み木に書かれたひらがなを並べて、「ほら、これは何て読むか分かる? 『いぬ』だよ。わんわん。分かる?」なんてやってしまうと、真剣勝負に水を差し、子どもたちが自ら伸びるチャンスを奪ってしまうかもしれないのです。上記の場面 1 は、遊びを通して二人の間にコミュニケーションが生まれた素敵な瞬間であり、『遊びの力』が発揮された場面だったと言えるでしょう。



場面 2 では、しばらくして「スタンダードな」ルールを伝えたのですが、おかまいなし。だるまさんがごはんを食べたり、変顔をしたりとエスカレートしてよくわからない遊びになってしまいましたが、それでもいいと思うのです。本来、子どもたちは、自分たちで遊びを創造する力をもっています。大人が、遊びを教えたり、導いたりするのではなく、子どもたちの『遊ぶ力』を信じて見守ることも必要なのです。大人が遊びの向こう側に期待するものはたくさんありますが、ひとまずそこは置いておき、今この瞬間に子どもたちの中に何が生まれているのかをじっくりと見つめ、子どもの成長を喜ぶたいものです。